



TITLE:

ルイ・アラゴンの「転換」：シュールレアリスムの時期

AUTHOR(S):

丹治, 恒次郎

CITATION:

丹治, 恒次郎. ルイ・アラゴンの「転換」：シュールレアリスムの時期.
Francia 1967, 10: 45-61

ISSUE DATE:

1967-01-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/137521>

RIGHT:

ルイ・アラゴンの「転換」

— シュールレアリスムの時期 —

丹 治 恒 次 郎

*

ルイ・アラゴンは一九三〇年を境としてシュールレアリスムに訣別したといわれる。だがこれがシュールレアリスムからの「断絶」であるか「移行」であるか。ある作家の詩的資質が特定の体制イデオロギーに（それが反体制のものであっても）多年調和を保つこと自体が稀であるが、この事実の軸にそって単に適及的に異質なもののからの「発展」を結論づけることはできない。転換を価値の序列に還元することは問題の矮小化を招くだろう。また、知性の anachronie から弁証法的唯物論へという論理階程の転換方式が、この転換に近接していればその具象性を捉えようとする場合、作家の精神の内的営為に対してはどこまでが有効であろうか。この小論ではアラゴンの転向時以前の作品の中に先行する転換の感覚的形態を課題とし、言語観、小説技法、イマーシュの特徴的形態の三点から、この課題を考えようと思う。

一、シュールレアリスムの「発展」

一九三〇年の十一月に、ルイ・アラゴンとジョルジュ・サドウルがウクライナのハリコフで催された第二回国際革命作家会議（三十二カ国参加、代議員作家数八十名）に列席するためフランスを離れ、ブルトンの「第二宣言」（一九二九）の後にも依然としてシュールレアリスム陣営の中心的存在であったはずのアラゴンがコミニズムに転向して帰国したという事実は、やがてシュールレアリスムの歴史におけるいわゆる「アラゴン事件」へと発展してゆく。これはシュールレアリスムの運動過程における「除名—離反」の形態のかなり錯綜した一事例である。「第二宣言」の中でブルトンによって摘発された数多くの人々——アルトール、カリーヴ、マッソン、スーポー、ヴィトラックなどとは異なつて、アラゴンはシュールレアリスムの中核的思想をブルトンと「共有」していた。だがモスクワへの旅から帰るやアラゴンは宣言する。「ご承知の通り一九三〇年の

暮にジョルジュ・サドゥールとぼくとはロシアへ赴いた。われわれは他の場所へ行くよりも快く、ずっと喜んでロシアへ行ったのだ。これがあの出発の理由として言うべきすべてのことである。」この転向の直接的動機はなにであつたかという問いに対してモリス・ナドーの「シュールレアリスムの歴史」(一九四四)も判然とした答を示していない。「ハリコフでアラゴンの演じた役割については次のことを除いてまだ何も知られてはいない。すなわち最も良きシュールレアリストの意図をもつて出発したアラゴンが会議の代議員たちの前でのかずかずの罪の告白の後にコミュニズムに改宗して帰国した事実だけである。」具体的事件の経緯のみを見るならばアラゴンの行動と発言は数多くの矛盾を含んでおり、アラゴンの態度変更は「まったく突如として」起つたというブルトンの証言(André Breton, *Entretiens*)を否定できない。ブルトンによれば出発当時のアラゴンにはシュールレアリスト陣営からあえて「自分を離反させる」ようなことを行なう気配は全然なく、同行のサドゥール(かれはサン・シールの陸軍士官学校の入学生に入学辞退を勧告する脅迫状を送り、官憲が動きだした後も謝罪を拒否し「超現実的」な議論で自己弁明したため禁錮三カ月の刑を宣告された直後であつた)がアラゴンを教唆した事実もない。ブルトンにとっては事の発端は「酔後の余興」であつて、事実アラゴンが旅行中にとつた連絡文書中には最後の帰国を知らず電報に至るまでシュールレアリスムの概念を擁護する一線に即して樂觀的であつた。(ブルトンはかれらの帰国直後にアラゴンが連帯署名をした一宣言をうけとる。これはブルトンの「第二宣言」が「弁証法的唯物論に抵触する限りは」これ

に訣別するという箇条を含む。さらにロジェ・ガロディの綿密な研究 *L'Inérent d' Aragon* (1961) に収録のアラゴン発言の会議速記録に照合すれば「モスクワとレーニングラードの文学者サークルと連絡を保ちシュールレアリストたちの共通の見解を表明した」(ブルトン証言)かどうかは疑わしい。)

アラゴンの当時の行動の矛盾というのは、旅行中に長詩「赤色戦線」を国際革命作家連合の機関誌「世界革命文学」誌上に発表した後にもなお「ブルトンとの意見の一致」を再確認したり、また、帰国直後の宣言でフロイト主義を「観念論的イデオロギー」としてそれに廃棄宣告を下した後にもなお次のような評価が可能であつた点にある。「精神分析学はシュールレアリストがインスピレーションの機構を研究し、それを服従させるのに役立った。精神分析学はシュールレアリストがあらゆる個人主義的立場を捨てゝるのに助力した。これを援用する相異つた諸精神によつて行なわれる適用に対して精神分析学に責任があるとみなすことはできないであらう。」(Nadeau, *Documents*)

アラゴンとは逆にブルトンに関しては、アラゴンの「転向はこれを一点として極めて明確な境目が設けられる。『それ以来帰国後最初の宣言以来』渦巻は拡がり、真理が有効性の前に抹消されねばならず、個人の人格性と同じく意識自体があらゆる点で権限を喪失し目的が手段を正当化するあの破廉恥な観念が伝播するにつれて、目もくらむ速さでその渦巻は大きくなっていった。」(p. 165, *Entretiens*)二十年の後になって回顧され、意識的に図式化されている点を考慮しても、その後のシュールレアリスムの運動経過を軸に

据える限りは、また、その後の長期にわたるアラゴンの作家活動から逆に遡及して考える限りは、アラゴンが決定的に「シュールレアリズム」から離反したことに議論の余地はない。しかしそれにもかかわらず、一九三一年十二月発表の次のようなアラゴンの記述はシュールレアリズムの連続性を設定している。

「弁証法的唯物論を唯一の革命的哲学として認識すること、たとえ対立自体が首尾一貫した性格のものであってもその觀念論的対立から出発した知識人が、革命の具体的諸問題に直面してこの唯物論を徹底的に理解し承認すること、ここにシュールレアリストの發展の本質的特徴がある。」

シュールレアリストの残存グループに対する政治的配慮の性格を割り引いて考えると、また、かりにアラゴンによるシュールレアリズムの概念の再把握と革新という仮設を肯定的に考慮するとしても、なおこのアラゴンの発言は彼の「離反」を証明するに変わりはない。なぜならブルトンをはじめ他のシュールレアリスト達はその全的態度でもってそのまま他者に参入することを固持したのだから。しかし依然として「シュールレアリストの發展の本質的特徴」とは何かという問いは問いのまま残る。アラゴンが従来のシュールレアリズムの中核的思想を「放棄」して政治行動の道を選んだと考えるのは皮相なのである。

政治革命へと向かう行動の道と、人間のすべての潜在能力の顕在化を目指す探求の方向という二者混在の性格は、シュールレアリズムの歴史においてアラゴンの転向以前にすでに際立った例証を持っている。ブルトンの「第一宣言」（一九二四）の中ではシュールレ

アリストのメンバーに名を連ねていたピエール・ナヴィールが一九二五年から二六年にかけて、革命主義者の「クラルテ」誌との共同戦線の失敗後のシュールレアリストの離散態勢に向って投げつけた告発は、精神の内的変革の理論に対抗する変革の有効性の観点に基づいていた。ナヴィールの発想とは、約言すれば、内部的体験と、外部的な事物と事件とに関するある種の体験とが提供する諸与件についての理論的考察を基軸とするか（形而上学的態度）、それとも精神がそれ自体で所持する感情にその精神がそのまま敷き写されて実現されるような精神の進行自体を重視するか（弁証法的態度）、という二者択一である。当然後者の立場にたつナヴィールの場合、現実的にはこの告発は「精神の解放が物質的生活のブルジョアの諸条件の廃止に先行するような、ある程度までこの廃止とは無関係な精神の解放を信じるか、あるいはこれに反して物質的生活のブルジョアの諸条件の廃止が精神の解放の必然的条件であるか」という形であらわれる。革命が先験的な精神の革命であるのか、それとも多様な諸事件の世界での革命であるのかというナヴィールの設問は、「形而上学的態度」と「弁証法的態度」とを截然と分つ二者択一の導出方法がきわめて非弁証法的な思考によるにもかかわらず、むしろそれ故にこそ二者択一はしごく明瞭な形をとって提出され、そのためシュールレアリストの陣営に対する攻撃力を鋭くしたといえる。（ブルトンは「われわれの間に痛切な不安をひきおこした」という。）だがこの「ナヴィールの危機」は二律背反の発想上からもアラゴンの場合と異なり終局的にはシュールレアリズム対ピエール・ナヴィールの対立、あるいはシュールレアリズムの外部へ出たナ

ヴィールの側からの投弾であつて、ナヴィールの「簡明」さはアラゴンの態度決定の不明瞭さとは異質のものである。モロッコ戦争の開始の時点である一九二五年とニューヨークの株式市場の大暴落によつて口火を切られた世界恐慌の渦中の一九三〇年との時点差を考慮しても、なおアラゴンがナヴィールと同じく「有効性」の観点からシュールレアリズムに向つて離反宣言を投げつけたとはいえない。われわれは精神活動の社会的有効性の原理と人間の全的態度の内部的自立性の原理との対立という通有の前提を廃止することによつてアラゴンの場合を考えようと思う。次章以下にもちこまれる仮設は二者択一の決定的選択ではなくて、シュールレアリズムを基軸として転換を内蔵する「移行」の、前論理的・感覺的形態である。換言すればこの場合「転換」は彼の内部世界の構造と言語による表現の仕方の中に求められる。

二、言語の問題

転向時以前のアラゴンにおける言語の問題は、さしづめ例えば次のような二つの言語観の共通点および差異をどのように捉えるかにある。前者がシュールレアリズム期以前の一九二一年にかかれ、後者がシュールレアリズム期後半の一九二八年のものだということとはあらかじめことわっておこう。

(A)「一つの語を使用するたびに、その語の選択を決定したところの恣意的な部分(精神の自由裁量になる部分)は拡がってゆく。選択された音声による脆い構築物はわれわれに幻影をいだかせないかぎり崩壊してしまふであらう。われわれは言葉の枝にとまっ

て言葉がわれわれの感覺的進歩を容易に助けけると信じている。」(Les aventures de Télémaque)

(B)「私が考えることが、ひとりでに表現される。めいめいの言語はそれぞれ異なっている。たとえば私は書くことなしには考えない。これは、書くことが私の思考の方法だということだ。書くことをしない残りの時間には、私は思考の反射光しか持たない。この反射は私自身についてのある種の洗面であり、実在するものについての追憶に似ている。」(Le con d'Irene)

(A)は言語に対する全面的不信、(B)は言語の絶対的肯定のようにみえる。前者にあらわれた言語の恣意的性格の暴露は、言語発想者自身の精神作用に対する主体の側の一つの透徹した意識を前提とする。言語の「構築物」も、言語の連鎖が感情生活に映しだす軌跡も、主体自身と符合するものではないという判断ないし感覺を前提とする(非所有者の意識)。この判断ないし感覺はシュールレアリズム期に至るも消滅しない。「いかなる文学上の体験も決定的なものではない」(Le Libertinage)。この否定的性格は、言語の伝統的形態に反逆し言語と論理の持続的性格に挑戦する点で、当初のダダの運動と親近性を保っていた。

「ぼくは自分自身から言葉を歯のように抜き取る。すべての理知、すべての感性、すべての理性と判断を失うために。」(Anicet, 1921)

ダダの戦闘的試みは、その全面的評価はいま留保するとしても、前世紀から第一次大戦前夜へと至る詩の概念の更新——言語による特定の秩序のもとに精神と感情の営為を表出するというよりも、詩

人の認識の営為と意識界の冒險自体が詩作の概念と一体化するという詩の位相変換——をその発生条件としている。それと同時にダダにとっては過去の集積された言語の諸体系は、いわば加算され貯えられた累積の総和ではなく、返還を迫られる膠着した負債の堆積の総計であった。「ダダは、精神のあらゆる創作物の中心にいる人間が、人間的実質という虚弱化した概念に対して、死せる物体に対して、不法に獲得された富に対して自己の覇権を肯定するところの深い感覚から生まれた」（トリスタン・ツァラ）。ダダはなによりもまず体系と持続性に対して反逆したといえる。持続性に敵対して瞬間を至上とし、主体の側では精神を *un lieu de passage* とするかれらは、現在を支点として未来と過去へとまたがる精神の往復運動を拒絶し、その全面的非妥協の破壊作業において逆説的に歴史感覚の存在を証明したといえる。一九一九年の *Littérature* 誌上（Valéry: *La Soirée avec M. Teste*, Proust: *Pastiches et Mélanges* 掲載の号）にアラゴンが次のように書く時は、かれはダダとはば全面的な並行関係にあった。

「……しかしエドモン・テストはシステムをもつのだ。なんという容易さで彼はもと来た道を引返すのだらう／＼その昔は冥界から生きて帰還した人間が神々のように崇められたのだ。」

ここでわれわれはアラゴンによってなされた批判的的確性を吟味する必要がある。アラゴンが時間の非可逆性の、（引返すことの）不可能性の観念をうちだしていることに注意すれば充分である。ダダ直系の、逆行を拒むアナルシズムがどのような言語観に導かれて行くかが問題である。「書いたものを読み返すのは不可能だ。私は瞬

間においてしか自分を知らない。」「言語はどのようにあらわれようと、単なる「私」(Je)に還元される。なにかの語をくり返すとき、その語は私以外の他のすべての要素を剝奪されて、ついにはそこに私の生がおのずと現れる「器官の響きになってしまふ」(*Les Aventures de Télémaque*, 1922)

この「素朴な」独我論を内包するアナルシズムは一つの到達点として独我論に至るのではなく逆にこれを発条として外部へ発出する。時間の非可逆性の観念が独我論の定在を許さない。実は独我論は「素朴さ」を脱する方向で初めて開花する。それは攻撃の武器となる。アラゴンのこの時期以後の文学活動は外界に対する「破廉恥な挑戦」(*scandale*)および反語 (*ironie*)と、シュールレアリストの無限の探求という二重性を帯びる。「おまえの内部世界を見てもうよ。デカルトが部屋着をまとうてソーセージを食ってるぜ」(*Le Libérinage*)。ダダの破壊的精神はこの階程で清算される。

「侮蔑を投げておくれ、かわいい娘たちよ。お願いだからぼくの知的な虚無のことを語っておくれ。あの年老いた伝説的なお化けのダダに逆らってぼくが文学や詩や芸術をほんの少し擁護するとしてもそれはあの聖シュールピス派の精神錯乱のお祭りのためではない。ぼくとしては、ぼく自身の飼料になる醜聞を起すのに都合のよい手段を誂らめるいわれがないだけなのだから。」(*Ibid.*)

すなわち冒頭の言語観(A)に見出される言語の性格は、言語発想者の鋭敏な意識(否定的・非所有者の意識)によって暴かれる恣意的対象の言語の性格から独我論のアナルシズムを経て、醜聞と反語による挑戦へと移行する。だが *scandale* と *ironie* とは他者の言語

作用の實在を肯定せねば成り立たない。かくして言語は一つの共同の社会的性格を得る。極言すればこのとき言語の否定的性格は肯定への転化を内蔵している。

言語把握の(B)の形は一見して言語の絶対的肯定である。だが、書くことなしには考えない、書くことが思考の方法だという断定は次のような裏面をもっていることに注意しよう。

「私の頭にうかぶすべてのことがごくわずかの間のみ持続し私自身が思考の記憶を全然見出さないようにになりたいと思う。」(Libertinage)

この自動記述の基本的理論は、まず、反省的意識と効用性に還元される既存の言語に敵対する闘いの武器であった。この点でシュールレアリストの自動記述はダダの遺産をうけ継いだといえる。しかしシュールレアリストにとって自動記述の主張と実践は反面において認識形式の破壊とは逆に、おのれのその形式への決定的な自負を踏まえており、思考とイマジージュの「實在的な物質性(ブルトン)」とそれらの非打算的な活動にたいする全面的信頼に根拠をおいていた。思考の記憶を失うことによって言語は叙述ではなく現実となり、認識がそれ自身で事物を完全にとらえつつ(夢の記述)しかも言語はそれ自体の实体を失わない。この「實在的」言語は思考自体となり意識は媒介者なしに存在と関係を結ぶ。反省の束縛を除去することによって直接的意識が言語に侵入し、沈黙が表現を獲得し、否定的—非所有者の意識が一極点において言語と和解する。かくして自動記述の発想の母胎——モリス・ブランショのいうシュールレアリズムの「コギト」は破壊を通じて白紙状態の中に言語作用の

肯定を内蔵する。だがこの「コギト」はその発出形態において反省的認識能力に対して反逆しその反逆の地平にあっては否定的性格を得ることに注意しよう。ナルシズム本来の否定者の側面がここにあり、それはたとえば次のような傾斜においてあらわれる。

(アラゴンのマドリッドでの講演、一九二五年)

「ああ、銀行家、学生、労働者、公務員、家僕の皆さん。諸君は有用性の農夫であり、必要性の振り子である。私は決して働かないであろう。私の両手は真白である。気ちがいの諸君よ。きみらの手のひらを、きみらが誇りの源とする知的なことを隠したまえ。労働の双生児の娘である学問を私は憎みます。ものを知るとは何事か、諸君はあの暗黒の井戸の底へ降りていったことがないだろうか。そこで諸君はなにをみつけたのか。大空へ向かうどのような通路をみつけたのか。私も同じく坑内ガスの爆発をしか望まない。その爆発が諸君を、真の思考の唯一の郷土であるあの怠惰へとつれ戻すのです。」「われわれはすべてに道理をわきまえている。われわれはまず諸君にとって貴重なこの文明を破壊するであろう。この文明の中で諸君は片岩の中の化石のように鋳型に嵌められている。西欧世界よ、おまえは死を宣告されたものだ。われわれはヨーロッパの敗戦主義者である。」「大いに笑いたまえ。われわれは常に敵と握手する者である」。(La Révolution Surréaliste No. 4, Nadeau)

アラゴンにおける言語||思考の實在性は(言語観(B)の言語肯定は)自動記述の発想法によって否定的—非所有者の意識と物質的言語との無媒介の結合の上に成立し、この結合の心的状態を発条として外部に向って否定者||破壊者として発出する。反省的意識を通じて

世の他者の言語諸体系は相互に実在するが、この場合その反省的意識に対して反逆する言語は他者への背反という発出形態をとり、一つの反共同的―反社会的性格をえる。約言すればこの時言語の肯定的性格は否定への移行を内蔵している。

第一に、他者からの判断を拒否しつつ同時に他者の視線を自己に向ってよび戻さずにはおかない「醜聞」の自己中心的求心力の方向、第二に、外部的攪乱を意識的に誘発し、自己の破壊（小説での作者の介入、読者への挑戦と反語の使用）を伴いながら常に無限へと向う遠心力をもつ思考―言語の方向。この二つは転向時以前のアラゴンに二者からみ合つて矛盾のまま共存している。醜聞、反語、侮蔑、不合理、夢の解放、狂気、錯乱は知性のビュリスムと結託しており、言語発想者は言語の社会的地平に根ざすと同時に言語秩序にかんするあらゆる形態の知的―方法的イデオを峻拒する。ここから次の評価が生まれる。過度に知的な（ピカビア）、口頭語の妙手（ブルトン）、記述内容以上に態度によってシュールレアリスト（モヌロ）、脳髓の人間、冷酷な論理家……機会において試行的にのみシュールレアリストであったのではないかと怪しんでよいほど（マルセル・レーモン）。

この地点のアラゴンにとって言語はその表現内容よりも表現の出現形態によって存在理由をもつ。具象をたどる観点から眺めれば前述の二つの性向は混在のまま直接に écrits としてあらわれる。次の「文体論」（一九二八）の断章はこの二元性の直接的記述の観点から捉えられる。

「ぼくが街路を横切るとして車に注意するのは、その逆の方がいい

かに諸君に英雄的にみえようと、また諸君がぼくの作品の中に慎重さと相容れないものの観念をこそ識別したと思つていようと、実はぼくが轢死したくないと望んでいるからでありそれは轢かれるままになるのが非常に賢明であるとは思えないからだ。そしてこのことは次のように言う権利をぼくから奪うものではない。ぼくは両親に対してこの世に生を与えてくれたことにいかなる感謝も懐いていないが、他方、反対側の歩道にはぼくの両足よりも先に右手を屈けて、誰かの、多分諸君の横っ面に一撃くらわせない。君に対してはいつか一撃くらわせないという強い志向をぼくはもっている。以上のことをよく知つてほしい。ぼくは与えられた条件の中で生きているが、鼻の形状、拳の力をぼくが選んだであろうか。ぼくがものを書くときは、これら任意のものたちの外部で表現するのだ。諸君がぼくの書くものを読むときは、生が言語であり文章体 (écriture) はまったく別物であることを忘れないでほしい。文法は置換不可能のものではない。不規則動詞のたぐいである。」(Traité du Style, p. 227-8)

「生が言語である」という樂觀的コギトは内的には生自体の不安定と、外的には言語の形象規定性によって不断に脅かされることにより、このことによってのみ逆説的に自己の存在証明を得る。このコギトは意識作用の基底的単位ではなくて前述の二元性の性向が暫時きり結ぶ接点である。すなわち、一方においては醜聞、反語、読者への挑戦、意識的にくり開かれる逆説的言辭、剽竊、冒瀆――これらは常にコギトから発出し外的攪乱を誘発しつつその波動の中で不断にコギトへ回帰する。コギトは此岸に在り自己自身の生の本来の

能力である。他方において自働記述、夢の解放、イマージュの過剰、眩暈、対象物の変形、シュールレアリスト特有の置換え（daysement）、無味への渴望——これらは絶え間のない自己破壊の連続を通じて現実の具体性の彼岸に収斂する絶対的コギトを設定せずにはおかぬ。最遠距離にあると同時に最近距離にあるところの逆説的一点。下底に実在すると同時に上方に架設される脱個体的な一点。アラゴンがこの一点を追及して「転換」したと予想するのは早急である。この「接点」はその具体的なあらわれから再度改めて逆方向に追求されるべきである。そこでわれわれはアラゴンの小説手法とイマージュの運用の二点に目を移したい。

三、小説手法——コラージュの技法

アラゴンのシュールレアリズム期の最後の小説「パリの農夫」（一九二六年）（小説の概念規定はいま論外とする。たとえばジェルメーヌ・ブレはこの作品をシュールレアリズムのアンチ・ロマンだという）は四篇に——「現代的神話への序文」、「オペラ座の街廊」、「ビュット・ショームの自然感情」、「農夫の夢」の四篇に分たれている。「序文」を別として前二篇は都会の二区劃と公園への詩的想像力の探険行であるが最後の一篇「農夫の夢」は断章の集計である。したがって小説の体裁をとるのは前二篇であるが主人公は話者である作者自身であり、物語の結構はなくて全頁これ驚くべき言語駆使能力の解放というより他はない。寸劇風のディアローグが挿入され、諷刺詩が入り、大小の活字の配列がある。固有名詞や商品名の羅列、語呂合せ、作者の介入は枚挙にいとまない。ただ小説技

法としてまず着目されるのはコラージュ（貼紙手法）の使用である。——不動産会社の告知文、強制立退の通知、新聞社の宣伝文、本日休業、落書き、劇場の座席料金表、レストランの値段表、標札、装身具店の広告、衛生器具店の広告、マッサージ等々。——公園の中では市街各区劃表示板、コンパ区の地図、方位の標示、市内各施設の位置表示の台石、記念柱の建造主旨文言等。これらはどのような小説効果を与えるか。

まず読書進行の切断の感覚である。読者は文体の流れの断絶を強制される。これは「作者の干渉」のもっとも極端な変形的事例である。読者は記述体から瞬間的に離れて過度に具象的な各種の形象を与える。コラージュのおおのは独立した意味を担っている。レストランの値段表は値段表以外のものではない。コラージュにぶつかった読者は昇降機の急停止に似た感覚を与える。それは裸形の具体性の感覚である。

さらに注意すべきことは「パリの農夫」においてこれらのコラージュはコラージュ手法本来の機能である形象の効用性の剝奪であると同時に、コラージュがすべて人間の社会生活の断片であることだ。ここでわれわれは前章で述べた言語の相反する二元的性向についての考察を継続して一つの謎を解くことになる。すなわち言語表現の求心力的性格（コギト）と遠心力的性格（無限への志向）とは、ある共通項を含んでいるということだ。両者の場合ともに言語は意識の外部に在り、意識にとって言語は創造されるものではなく発見され選択されるものなのである。（ここからたとえばロートレアモン剽窃の弁護が生まれる。）scandaleを惹き起す言語は既述のご

とく言語の外的實在性を前提しており、本来 *scandale* は社会的行為である。いかに内的諸動機を踏まえていようと他者の言語体系と接触し（言語の外在化）そこに攪乱現象を捲き起さなければ主体の言語は *scandale* の武器とはならぬ。他方自働記述の発想は、意識内部に他者を通過させる「自己解放」の発想である以上、言語は凝固した意識を破壊するところの意識外部の他者であることが前提されている。かくしてコラージュの手法は言語の外的實在性の一表出形態となる。「パリの農夫」においてはコラージュの人為的使用がイマージュの自然的湧出と対応し、一時的な、そしてその一時性のために極度に鮮明な、均衡をえている。この時に限り固定と運動の共存が可能であり、實在的言語と想像的なものがかくして一つの磁場を持つ。例をみよう。

キャフェ・セルタの値段表

| | |
|-----------------|--------|
| FLIPS | 3F. 50 |
| ROYAL FLIP | 4f. |
| IMPERIAL FLIP | 4f. |
| Liqueurs | 3f. |
| GRANDES Marques | 4f. |
| PORIO CERTA | 2F. 50 |

ROYAL 3F. 50
IMPERIAL 5F.

「……シュールレアリズムが全権利を回復するのはこの場所である。シャンパンの栓で代用の蓋がしてあるインク壺を店が出してくれる。するとさあ出発だ。イマージュよ。色紙つぶてのように降ってこい。イマージュ、イマージュ、あたりいっばいがイマージュだ。天井に、肘掛椅子の麦わらの中に、飲みもののストローの中に、電話交換台の板の上に、輝いている空気の中に、室内を照らす鉄製角燈の中に、雪のように降れ、イマージュよ。クリスマスだ。雪となって樽の上に、信じやすい心の上に。」(p. 99)

言語の外部的定在とイマージュの溢出の動きとの両者を保証するのは文体の速度である。時間の非可逆性はきわめて具象的に作中にあられる。それはオペラ座横の街廊を歩んでゆく主人公に対するいずことも知れぬ外部からの呼びかけと、それに対する話者の瞬間的反動の形をとる（誰だ、そこでぼくを呼ぶのは。ルイ。遅すぎる、遅すぎるのだ。進もう、先へ進もう。誰かがくる等々。）すなわち速度というものは常に停止を含んでいる。停止を足場として速度の感覚は生まれる。この停止の一点において外部と内部との「接点」が生じる。かくして作品に頻出する *piège, étreur, frisson* の語はこの「接点」に起因する。これらは急速な連想力の挫折であると同

時に話者にとって一つの恩恵となる。この点上において主人公（主体）の視界はどうなるか。外界はその鮮明さにおいて極点に達する。偶然を自己の全体験とみなす人間にとって「世界が与えられた」ということは感情の所為ではない」からには、この「接点」の認識上の構造を見なければならぬ。

「あのハンカチ店の女商人や、あの小柄な砂糖売りは、ぼく自身の内面的極限であり、ぼく自身の法則と思考法にたいして、ぼくが持つ理想的な眺め（*vues idéales*）である。かりにこの街廊がある束縛から自己を解放する手段でなく、自己の力の外へと越えていまだに禁じられている領域へ到達する手段でないならば首を吊られた方がよい。」（p. 107）

主体の存在が視界（外部世界）の枠を決定するのではなく、逆に視覚像の外在化が主体の存在様式を決定する。内部はこの眺めの一点において飽和点に達し、自己は鋭い尖端と化して外部に突きささる。外部は兌換されて逆に内部に対して視力をもつ。内部の外部への転化でありこの時自己は果実の切断面のように鮮度を得る。かくしてコラージュは「作品」となる。「現代世界は私の存在様式と結婚する世界である」（p. 107）という「定義」の内容はこれである。視力は自己確認の手段ではなくなる。視力は「自分自身の突端で一人きり」（p. 134）であるが、絶望は沈黙せず透明度をえる。この時主体は自己意識を脱却するかにみえる。視界そのものが出現するのが「パリの農夫」の基調である。このことを踏まえてコラージュの手法の例をみよう。

話者は街廊の一角へでる。反対側の角はシャンパンの売店の隣に

整形外科医療具店（兼包帯販売店）がある。木製の関節の手、ばらばらの手、杖、松葉杖、治療用吸い玉、偏頭痛用の頭止め棒、洗浄器の中の切られた手、各種脱腸帯、静脈瘤用の靴下、花模様のついた灌腸器、婦人用バンド、ピンク色、赤色、白色、ゴム製、絹製、洗浄器、ポンプ式灌腸器、注射針、注射器、ゴム製湯タンポ、洗眼用コップ……そして三カ国語でかかれた各種予防具の貼り板のコラージュ……街廊の奥には小さな黄金の骸骨があり金属性のこびとの地下の精がいる。これらの進行を経て「外部への転化」が起る。輝くこの小人神は「われわれ自身の図式だ。」話者は *impasse* に到る。これは想像力の *impasse* でもある。やはり一つの彫像がある。彩色され、ばら色の肉をつけて黒い毛がはえている。「接点」は次のような形をとる。

「こうしてついにわれわれは最後の地点まできた。ここではガINETT 石の乳房をした人間がおのれの幻影を好み、自分の発する笑い声のように虚勢をはってもはや彼は感覚と精神の限界を知らない。かれは神々を修正し神々にとって替り、空気の流れがまざり合うこのいかかわしい通路の末端の、暗影と建物のために逃走が容易になる地点で、かれ自身の過誤と謎のための奇異な神駝をつくるのだ。ここでは遂に人間が、一種の知的咬爪症（*onycho-phagie intellectuelle*）に満足しきつてゐる。ここで彼はおのれの実体でありおのれの毒である砒素の料理で身を養っている。靴磨きと包帯販売店とを仕切っている垢だらけの窓から洩れる光がほとんどどいていない露地に、かれは最後の一瞥を投げる。一方がテアトル・モデルヌのバアに通じている二つの階段状通路の

真正面である。この最後の一瞥は、曲り角から通路が光を受けているアリゴニの調理場へ投げられる。おのれの眩暈の主人でありかつ奴隷となった彼は、いまやその眩暈を二十九番地三号の地点で支えている。(p. 124, 傍点丹治)

視覚像の客体的実在性は特異な饒舌を許す。イマージュの外在化に次いで注目すべきことは、上記の *impassé* においては主体者の視力自身が外在化される事実である。立像が主体の眼を仮托される。いや仮托ではなく主体の眩暈は客体(立像)の眼によつて「支えられる」。主体はこの瞬間決定的に凌駕される。このような瞬間は永続しない。逆に断絶によつてこの瞬間は保証される。そして断絶はコラージュによつてなされるのである。この「二十九番地三の地点」には調理場とテアトルの入口との間に一つの扉があり、それは簡潔な文字で飾られる。「マッサージ、三階」。このコラージュは *impassé* に切込まれた鋭利な刺刃となる。そこから主体の進行が再現する。「暗い階段。世界の開花へと導くのはおまえだ」という風に。

だが問題は解決したであろうか。眩暈の一頂点では人間の意識が外界を征服するのではなく外界が意識の極限を暴露したのではないか。だとすれば新たな外界であるコラージュによる切断は何の解決をも生まない筈だ。主体は錯誤(*Erreur*)をいだいたまま移動する。換言すれば移動「者」が存在せぬまま移動する。この逆説的移動が小説「パリの農夫」の真の主題である。一見すれば非効用的なコラージュの手法はここで最大の効用を得る。内的営為から切断さ

れ貼りつけられた具象性が「移動」を救済しその担い手となる。

「錯誤」が二面性をもっていることには注意しておこう。「真理」というものはすべて錯誤にとられた場合にのみほくを襲つてく

る。……出発点において主体の運動のシステムへの抽象を拒否し反省的意識に破産宣告を下した者にとって、運動の法則化が可能であらうか。「パリの農夫」はその探索と錯迷の直接的記述である。

錯誤は錯誤のまま提示され、他方移動は呼びかけによつて触発される「目にみえぬもの」である。「錯誤」と「移動」のこの二元性はさらに追及されるべきだが(次章)、今のところ外界と内界との接点——外的言語と想像的なものが眩暈と錯誤を通じて合流する奥底の *impassé* の一地点——においては記述的言語とイマージュは双頭の獣である。移動する主体は不可避的に錯誤へと逆行する。

歩行者の旅の終点は街廊の端のみすばらしいテアトル・モデルヌである。観客席の扉の前はオレンジ色に塗られたバアであり、ピアノに合わせてダンスが踊れ片隅で飲めるようになっている。観客席にはさまざまな人種がいる。十五歳の少年、肥満した男、行きがかりの客、ばら色のボンボン娘、商売女、幕間の女優、肉屋、卒中の傾向があるポルトガル人、——下卑た笑い声、半畳、特殊な会話、踊り子たちからのやり返し。……錯誤の意識構造は錯誤の美学的構造へと転身してゆく。

「模造真珠による冒瀆とびかびか光るガラス片で飾られたバターライの冒瀆」バラ色の飾り石のついたアラビア風のレースが凍りついていて、そこでは人間の顔も溜息も鏡や気取った反響を取り戻さない。精神はこの網状の畏(*Peur*)につかまれて網は精神を引き

ずって再帰不能のままその宿命の結末、ミノタウロスのいない迷宮へ、つれてゆく。そこにはラジウムの指をもった「錯誤」が、ぼくの歌う恋人が、ぼくの悲壮な影が、聖処女のように転身して現れる。 (p. 134)

鏡と反響(反省的意識)——畏(外界との接点)——錯誤(イマージュの凝結)、という道筋は再帰不能の進行をとる。このとき言語とイマージュは一体となり、「移動」の系は封じられたかみええる。言語はコラーージュによって極限の一表現形態を得たわけだがイマージュの側からみた場合、既述の「接点」はどうなるか。

(注1)

心理的にはこの主客転倒は稀ではない。局限して心的現象のメカニズムのみを捉えるなら「視線の他者への転換」は精神分析の綿密な臨床的記録をまつまでもない。性的倒錯における露出症患者の症例は、他者へ転化された視線による一種の融合体験であり、患者の極度の羞恥心(自己意識と共存しうる。羞恥心が他者との直接的結合を妨げ、転化を準備する。この小論では転化の静的・分析的性格ではなく表現上の運動的性格が問題である)。

四、イマージュの問題

すでにみたようにアラゴンにとって言語は主要な社会現象であると同時に錯誤と驚異(Le Merveilleux)の担い手である。冒險的な言語体験に身をなげ込むことは、諸関係を——作者と読者、作者と公衆、作者と社会とを結びつける諸関係を裸形にすることである。

このことから、言語を介して都会の心臓の動悸を探りあてようとする想像力の探険への意志が生まれる。外界は具象性の中に実現し、このとき主体は常に「移動」する。(イマージュの社会的性向)。

しかし他方言語は有効性に還元されず、「錯誤」が精神の終着の地点である。このとき想像力はその発現の極点において凝結し、いわばイマージュの円環体を形成する。主体はこの円環体の中に消滅する。(想像力の性向)。この二性向は重複し錯綜している。一方において移動はこの凝結によって運動の契機を与えられ推進力を得るが、他方凝結は他者の決定的な具象性によってその基底を得ている。このことは言語の観点と小説技法の観点からすでに述べた。残る問題はこの二性向の各項である二者、すなわち主体の移動と外在的イマージュとの関係である。

いまやこの二つの項を並列的に対置しようとしても無駄である。アラゴンの記述の中でこの二つの項はやはり相互に錯綜して直接的に現われている。「百の状況から発見された精神の形象的な活動とメタフィジックな活動との間の親密な関係」として現れる。これらの活動が「缶詰めとなって意識に達し」アラゴンに神話の観念を再検討させる。このとき思考の進展の特性は神話の発生の特性に類似した機構を得る。精神の「運動」と想像力の「神話」とが次のように融合する。

「ぼくには人間が、開けきった空の下で水に浸される海綿のように神々でいっぱいだと思えた。これらの神々は生きて、自分の力の絶頂に達し、香りのただよう祭壇を他の神々に残して死んでゆく。神々とは、すべてのもののあらゆる変形の原理自体である。

神々とは運動の必然性である。かくしてぼくは聖なるあまたの凝結物の真中を酔い痴れて歩きまわった。ぼくは動く神話を抱懐しはじめた。それはまさに現代神話の名に値する。ぼくはこの名でそれを思い描いた」。(p. 141)

この「神々」と運動との二者融合の同義性の結び目をはぐそうと思えば視点を移しかえねばならない。

「パリの農夫」にはもう一つの主要な焦点がある。「戦慄」(trisson)の観念である。戦慄が内界―外界の「接点」に起因することはすでに述べたが、戦慄の発生の機構を知るためにはアラゴンの「自然観」を検討せねばならない。アラゴンが転向時以前においてすでに後年のレアリストの目を持っていたとするのは速断である。客体自身が直接的な具象として捉えられるためには迂路を経ねばならない。メタフィジックの道は不可避であった。「ピュット・シヨームンの自然感情」の中でアラゴンは自然の観念を検討している(p. 154-156)。アラゴンによれば従来の自然観念は人間不在の対象物しか包摂しない。言葉の古い意味では人間の作品というものが醜悪だと見なされ、人間が関与しない神の作品と人間の作品とは区分され対置されていた(もちろんこれはヨーロッパの場合である)。自然の観念はキリスト教の一神論、およびそれから派生した有神論と緊密な関係をもっている。キリスト教が自然という感情的力をもたらしたので自然はあらゆる形而上的価値を失った。アラゴンによればこのメタフィジックの価値を奪還しなければならぬ。新しい神話は自然全体の中へ伸びている。このような延長を再認識することが神話に威力を与える。自然は他ならぬ「外的世界」以外のもので

はなく、「精神の極限としてその精神の唯一の構成を与えるような表象」である。ここでは既述の「接点」が自然の観念から映し出される。すなわち世界は意識の方へ少しづつ時折やってくる。このとき感覚的体験自体が意識のメカニズムとなる。ここから次の命題が生まれる。「自然全体がぼくの機関(machine)である」。「自然はぼくの無意識である」。したがって諸感覚が自然から主体へと引渡すものは自然から切り離されることがない。しかし主体の感覚所与と無意識である自然とが結合するのは稀な瞬間に限られており、この結合の瞬間の意識がアラゴンのいう「戦慄」である。「戦慄」において主体は外的世界の拡がりを獲得する。「自然感情とは外的世界の意味である」がそれは同時に「神話の意味の別名にはかならない」。だから外界と神話世界とを同一視するアラゴンにとって「神話とは意識の唯一の声であり、論理的直観の領域外にある」。この mysticisme はそれ自体としては特異なものではない。注目されるのはそこからの発出の姿である。アラゴンは意識が無意識のうちに含まれていることを肯定する。無意識の内側の意識が発動するとき、その劈頭の意識性格の特質は、出発点が figuratif でありそのあとに logique がくるような進行過程である。この logique はアラゴンによれば「感情的後退」である。かくして出発点に具象が外在する。これが具象のメタフィジックであり、ここから次の逆説が生ずる。「世界が自己の中へ侵入してくることは世界が自己に与えられたことを少しも意味しない。数学者が最初の公準を得るときと同じく、ぼくが世界において選んだ出発点によってぼくが世界を自分と与えたのである」。(p. 151) この逆説を支えているのは point

de départ の語である。外界と内界との接点に起因する点で錯誤と戦慄とは近似するが、錯誤が終着の地点であったのに反して戦慄は point de départ を母胎とする。logique が後退を意味するとすれば出発とは何に向っての出発か。出発点の実体が当面の問題となる。

前章においてはわれわれは主体の外的世界への転化をみた。そしていま、「戦慄」を主題として逆に外的世界の主体への転化をみたわけだが依然として問題は未解決である。「接点」における外的世界の顕在性（具象）を追及しても、またフロイト主義の詩的想像力における血肉化に焦点をしばっても、精神的事件たる瞬間の構造を扱う限りは事は依然として変らないのである。「動く神話」はいかにして可能なのだろうか。あの主体の「移動」（時間的性格）がイメージあるいは「神話」とどのように結合するか。「精神による征服などなものでもない。」いまや具象的思惟のみが現実であるとアラゴンを書く。だがこれもやはり出発「点」の記述なのである。「私」は「思考の事故を記念する十字架」に直面している。ここにアラゴンの転換の感覚的形態における一契機がある。

「le concret についてのみイメージがある」。「狂気とは抽象と普通との具体とイメージに対する優越である」。……これらの断章を含む最後の篇「農夫の夢」について後年アラゴンがロジェ・ガロディに確言したところによれば、この作品（とくに断章から成る「農夫の夢」）では「文章体にいるままで観念論的の手法を使用することによって、極限まで導かれた観念論的の挫折が描かれた」という。「私はそこから出られなかった。」しかし「パリの農夫の帰結

は観念論の否認である」(Garandy, p. 148)。ここには溝を飛び越えた者の現場追認の「要約」がある。適及的方法を保留するわれわれは、論理が後退であるとするあの感性の転換形態にたち戻って、既述の「接点」の運動的な姿を問わねばならない。

「ビュット・ショーモン」の自然感情の最後の数頁はシュールレアリズムの傑作であると断言できる。要約は不可能だがイメージと主体の進行との二律背反の二つの項の結合を、その感覚的表現において検証するのは無益ではない。われわれはここに、「瞬間」に替って「持続」が一つの相貌を帯びるのを見る。イメージと主体の二者が合流し、主体の凝縮である頭(tête)のイメージに結晶する。

「……ぼくはこう思うようになる。この星の光をあびている小枝の下で自分は一人きりではなく、数々のものが存在し、この波の動きの中で生気を帯び、自分と同じように呼吸をして同じように星々の金色の指で玩ばれている。人間たちも存在するだろう。ぼくは夢想する。するとぼくの頭が離れる。どこへ行くのか、切り離されて？ ぼくの頭は人間たちの棕櫚の中にとまった。ロマネスクは奇異なパノラマ。寓話的な人物がみんないる。食料品屋、警備隊長、女王、歌手、エスキモー、牛乳屋の女店員。ぼくの頭はまだ地面に落ちない。頭は目を大きく開いている。これはぼく自身を反映する撮きまぜられたイメージではないか？ 人間たちの表穂をすくい採ってそよ風が吹き送ってくる奇妙な言葉をおまえは聞かないか。それは錯乱した言葉、それは幸福を語っている。

ぼくの頭はまだ落ちない。お聞き。晴れた一日の終りに牢獄の湿っぽい壁から湧き出る歌のようだ。無数の平凡なことば。すべてが終ったとき、だれかが思いだすとすれば、記憶に帰ってくるのはもとも月並みなことばなのだ。「きようはともよい天気だったね。……淡い色の服はあまり好きではないのよ。……あのかたに逢った?」とてもきれいなかただって……等々」まだ落ちてこない、ぼくの頭は。……(中略)……話していた人間がその時立ちあがる。そして少しの間もとに戻っていた頭をふたたび彼はひきちぎる。彼は自分の頭を身体から引きちぎる。異常な力、薄い筋肉の腕には思いもよらない力で彼は自分の頭を遠くまで投げる。その頭の目は青く唇は言葉に長じていた。彼ははつきりで見分けのつく自分の頭を遠くまで投げる。頭は皮を擦りむく小石の上を跳ね返り、転がり、逃げてゆく。頭は山の斜面を水切りのように跳ねてゆく。頭は降りてゆく。深い谷間の方へゆく。一瞬、群生したから松が茂みの中で耳をひっかける。だが始動の突進力が頭をふりとばす。樹々はかすめられた葉のやわらかな音をたてて身をかわす。頭はとび去って畑に着く。転がって行け、頭よ、耕作地の中を、蒔かれた種の中を。頭は穀粒とまざり合う。穀物を畑ぎ分ける農夫が頭を唐箕にかけ、横側の垣の方へ投げやる。やがて小学生がやってきて拾うだろう、黒い頭髮の下に血のついた頭を。その腕白小僧がいう、「この桑の実はまだ片側が真赤だぜ」。かれはくやしそうに屑の中へ抛り出す……」(p. 229-231)。

イマージュは持続する。頭は最後には海に向って静かに転がって行く。自分の思考と別れた人間は、遠くで最初の海の波が頭の傷口を洗ったところ「逆立ちされた疑問符のように不動性から脱出する」。首を斬られた肉体は血を噴射し、青い大気の中で飛び散る血潮は巨大な羊歯植物に変貌しやがてそれは天空の中のルビーの点線となつて無用の肉体は透明によって侵蝕され、人間は星座の中の一記号にすぎなくなる。

知的アナリズムによって飽和点に達した自我は頭部となつて切断され、人間は拡散して *disseminé* となる。ここに再生の形象よりも昇天の形象を見出すことは容易である。事実この最終頁は美しい。だがわれわれはシュールレアリズムのドラマを「小学生によつて拾われる頭」にみる。焦点を、跳躍する「頭」に再度絞りたい。

文体の観点からすれば一人称から三人称への転化がある。「私の頭」は途中で「彼の頭」に変貌する。当初夢想によつて「離れた」頭が彼においては投げられる。自然発生のイマージュに対して異質な新しい意識の介入である。この意識は進行を生む。換言すれば外在化された頭(自我)の跳躍はこの新しい意識によつて始動力を与えられる。絶えず対象から逃れ去る意識という既述の意識の非所有者の性格は「頭」のイマージュの中に流れこんで凝結し、これを媒介として(切断によつて)意識は運動の始動力に転化する。主体の「移動」と想像力の「錯誤」との統一の一例である。文章体においてはここに三人称への道が予想されるが *logique* に先行する具象の地点にとどまる限りは一人称単数はすべてに先行する。「農夫の夢」は

その地点の極限において表現をえている。「私は舞台に登場しない。しかし私にとって一人称単数は人間のすべての具体性を表現する。すべての形而上学は一人称単数に属し、すべてのポニージムもそうである」。(p. 249) この見解は次の言葉と並置されていることによって、われわれにとって意味をもつ。「私の生はもはや私に属さない」。

認識の観点からすれば自己の外在化は二重の構造をもつ。自己は外界に啓示をえて外界の侵入によって存在形態を得るのみでなく、粗野なほどにまで鮮烈な「頭」のイマージュによって逆に内界が切断されて外在的形象を与えられる。これは内から外への外化運動であると同時にまた内外切断の操作（主体による）である。このとき言語主体とイマージュとは双頭の獣ではなく両者は分離する。イマージュは「錯誤」の円環体から切断され跳躍の運動に支配される。イマージュは具象の中を滑走する。その始動力は言語使用の主体であるところの新しい意識である。

「瞬間」の発想に替って「時間」の觀念がここに導入される。すなわち世界把握は鋭敏な主体の感覚的な錐の尖端によって行なわれるのではなく、主体を切断しうる運動の相の下に世界が出現するからである。外界と内界との「接点」は運動の一発生条件へと変貌する。接点という空間的位相は運動の動機に転化する。これは明らかに象徴主義の土壤からの絶縁だがこの状況に対してレアリストたる主体がさまざま適合するのではない。一九三〇年のアラゴンにとってもなお「現実とは矛盾の明らかな不在」であり、「驚異 (Le merveilleux)こそ現実の中にあらわれる矛盾」であった。したがって

この驚異——シールレアリストの発想の根源的母胎である一觀念——に沿ってわれわれの主題を敷衍しておきたい。

アラゴンの一九三〇年（転向以前の三月）の絵画論「挑戦された絵画」は美術におけるコラージュ手法の援護を趣旨とするが、ここで「驚異」は一つの論理的な仮設を得て再定義されている。驚異とは「現実の否定」であるが仮設というのはこうである。驚異による現実の否定から生ずる新しい関係は本質的に倫理的性格を帯びる。驚異とは常に、驚異がそこから生まれてくる世界のモラルと激しい対立をなすところの倫理的象徴の物質化 (matérialisation) である。……かくして論理を「感覚的後退」とみなした感性が驚異（具象）を介しておのれの一論理を獲得する。だがこれは運動の論理の系列に属し、本来的に論理自体の完結性を持たない。なぜならこの論理は人間の動機と結合しているのだから。倫理的象徴の物質化を目指す動機が論理と結合する。すなわちこの仮設の論理はアラゴンの転換の感覚的形態と直結しているといえる。(1966. 10)

おもな書目

Louis Aragon : Anicet ou le Panorama, Le Librinage,
Le Paysan de Paris, Traité du Style (Gallimard) Les
Collages (Max Ernst, peintre des illusions-1923, Le Pein-
ture au déf-1930, Collages dans le roman et dans le film-
1965, Petite note sur les collages chez Tristan Tzara et
ce qui s'en suit, etc) (Hermann)

André Gavillet : Aragon surréaliste, Editions De La Ba-

- connière, 1957)
- Roger Garaudy : L'itinéraire d'Aragon (1961 Gallimard)
- Hubert Juin : Aragon (1960 Gallimard)
- Maurice Nadeau : Histoire du Surréalisme, Documents Surréalistes (1964 Editions du Seuil)
- Yves Duplessis : Le Surréalisme, "Que sais-je" P. U. F.
- André Breton : Entretiens 1913-1952, (1952 Gallimard)
- Maurice Blanchot : La Part du Feu (Gallimard)